

花 桃

本
田
雅
子

羽田から高速バスで町田へ向かう

バスの右側の後部座席に座る

上京するたびごとに

平林寺が思い出される

若き日に訪れた禅宗の寺

境内の林の足下には熊笹が生えていた

ポストンバッグを肩にかけ

谷間のような道を歩く

坂の下を行ったり来たり

寒さの厳しい真冬

目指す家にはたどり着かない

身体が冷え切り手足が痛い

ここから出られないような気がして

とうとう電話をかけた

今どこに居るのか分からないのよ

だからタクシーで来てって言ったのに

自転車で駆けつけて来た娘と坂を上る

家の中で赤ん坊が泣いていた

娘は故郷を遠く離れて嫁ぎ

この地で子が生まれた

二階の窓から公園の木立が見える

季節風に大きく揺れている

乳飲み子を囲み静かに暮らした

雪が溶け

いつの間にか風が暖かくなっていた

武蔵野の面影を残している公園の

外路樹に桃色の花が咲き始めた

花桃という

初めて見るが鮮やかな桃色

春の小さなぼんぼりが灯る